

信州読書会 YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書 幸田文 『流れる』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字程度で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

YouTubeLive <https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 <https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)

幸田文 『流れる』



第 400 回の YouTube 読書会の課題図書は、幸田文の『流れる』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『流れる』 幸田文 感想文

幸田文の作品がとても良いからと友人に勧められてもう十年以上経つのだが、今回初めて読んでみてその凄さに驚いた。

1950 年に「私は筆をたつ」と断筆宣言した翌年、柳橋の芸者置屋に住み込み女中として働いた作者の経験がこの作品となったそうだが、断筆をしてなおこれを書かせたその意欲は、相当に異趣な土地での面白い経験であったにちがいないと読んでいてそれが理解された。

主人公である女中の梨花が、目利きの「しろと」であり、芸者置屋の「鳶の家」の美しい名妓の主人が目利きの「くろと」であるのだ。

互いが探り合い、自分に欠けているものを相手の内に見つけ、依存、羨望、見栄、嫉妬など、その内面の駆け引きが事細かにすぐリアルで、女目で見ると「粋」の美しさと愚かさの多くを日常から梨花が見逃さないのが読みどころだ。そして傾いていく置屋にさまざまな難儀が起こる。

(引用はじめ)

「名妓というものの全貌を掴みたいと梨花はおもった。主人は梨花を無条件に感心させるところももっているけれど、今夜のこのざまは褒めたものではない。未熟なやぼくさい失敗だというほかなかり、これで何が名妓だと云いたい。日常ちらちら無意識にこぼして見せる名妓の片鱗みたいなものには人を惹くちからがあり、そういうときに梨花は文句なしにいいなああと気に入るが、もう一面では、なにを！名妓の手法なんか口にほうり込んで食っちゃえ、嚙みこんじまえばあつちのかたなしになって、こっちは腹の足しになる、それでいいのだといった対抗的な気持ちがある」(新潮文庫 p.113)

(引用おわり)

ゆすりにきた鋸山の親爺に対しての主人のおぼつかない態度への言葉なのだが、この「くろと」の中で「しろと」が生き抜くための洞察力と気の強さが方々にある。この表現力の逞しさがとてもいい。汚い仕事、使いっ走り、女中として拒めないことだらけを生き抜く、時に冷静な強さと勝ちっ気なところ、隠れた優しさにとても共感できた。

そして芸妓になれなかったこの家の娘勝代、同居する従姉のだらしない米子と生意気なその娘、そして周りの芸妓たちの美貌と芸、その外にある不埒さに自己肯定感がなく心がよじれている勝代が悶々と度々切れる様子が辛辣で、良く言った！と思える部分と、その底意地の悪さに辟易する場面とがごちゃごちゃに入り交じり、それぞれの心の醜さや無邪気さ、愚かさをよくここまで書けると思った。

作中によく出てくる「所詮他人事だから」と、まさにその度々の渦中の言葉なのだが、読んでいてもそう思うくらいの修羅場ばかりだ。

そんな梨花が、傾いていくこの置屋を払拭するように土地の演芸披露のために主人が猛練習している「清元」の音色を台所で聴いている場面が印象的だった。

(引用はじめ)

「総浚えにあと幾日もないという朝だった。きょうだめなら所詮もうダメなような気がして聴いていた。味噌汁の大根を刻みながら、聴くというよりむしろ堪えていた。もっといやなそこへ来かかる。節はこちらももう諦(そら)んじている。いやな声、へたを期待しているへんな感じだった。それがさらっと何事もなく流れていった。できた！と思った。そしたら、ぐいと手応えがあった。包丁が左の人差し指と中指の第二関節に皮膚を削っていた。白い大根が紅く少し汚れていて、右手が左手を一しよ懸命にきつく掴んでいて、痛さだかなんだか涙腺はゆるんで生温かい。手錠をかけられたような左右くつついた手を挙げ、割烹着の上膊で顔のほうを動かして眼をこすった。日向で見る絹糸よりつややかに繊細に、清元の節廻しは梨花の腑に落ちて行った」(p.262)

(引用おわり)

しろとの土地よりここが居心地が良い。そしてここが好きな梨花。

梨花は既にこの名妓のいる置屋の立派な女中になっていたと思われた。

(おわり)

『流れる』 感想文

読んでいるうちに、自分の祖母(大正6年生)やその姉妹達の事を思い出した。

幸田文は明治37年生なので、1回りくらい下だが、当時の生活、着物の着方、人のお家への訪問の作法、買物のやり方など、花柳界のしきたりはまた違うのだろうが、それに似た生活があったように、うっすら覚えている。

そして、それらは、私の上の代ですら無くなって行き、私の代では、考え方も、生活方法も、全く受け継ぐ事無く、消えてしまった。

昔は、今から思えば、いろいろな事が、よく言えばおおらか、悪く言えばルーズだったように思う。だからこそ、格のある置屋であるのに、芸妓への払いは、そこまで悪気無く(ここが揉めるポイント)遅れていくのだ。

ラーメンの出前を人も通れない裏手から渡されるとか、玄関が病気の犬の臭いとか、廊下に干しっぱなしの下着とか、めちゃくちゃだが、昔はそんな事でも、お互い様で許し合っていたような気がする。

今はそういう事にも、不寛容な日本になっているな、というのが、私の感想です。

(おわり)

幸田文 『流れる』 感想文

祇園の花柳では、よく 16 歳で東北などの遠い地方の少女をよく好んで舞妓にするという。何かで見たが、ほかの街の花柳界は、大学を出ていたり、比較的若くない女性も芸者になれるようだ。ある時、河原町から新京極をこえて、市役所の近くのCDショップへ向かう時に、寄り道で、散歩がてらに先斗町を通ったことがある。その時、舞妓さんが歩いていた。彼女らは私を含めた観光客の視線をよく気にする。おそらく、追いかけられるのだろう。必要以上に後ろから撮影されたり、見世物にされると気分が悪いだろうし、たとえ私にそういうストーリーカーをする意図がなくても、そういうことにまで気を付けなければいけないことに同情する。

『流れる』では業界人以外の人間を「素人さん」というが、作者はこの言葉を花柳業界の人間が、逆に世間のルールとかけ離れ、浮世離れした人達であるという皮肉を込めて多用している。

常識のなさという面で、象徴的なのは彼らの子供の存在とその扱いである。次々と仕事先を変え、その方々で厄介になる米子という女性の娘のエピソードを読んだときに、ユゴーの「レ・ミゼラブル」で出てきた、パリでたむろしている浮浪児たちの存在を思い出した。ユゴーはパリの浮浪児たちについてこのように述べている

「パリの浮浪児は、恭しく、皮肉で、生意気だ。(中略)結局、ひと言で要約すれば、不幸だからこそ楽しく暮らす者である。(ユゴー著:『レミゼラブル 3』新潮文庫,22 頁-23 頁)」

春さんが遭遇した米子の娘も、彼らと似ている。『流れる』の 66 ページの冒頭、開口一番「米子の娘はまったく手の付けられない嫌な子だった。」と書くほどである。相当憎たらしい生意気な子供だったのだろう。親の都合で、居候先をとつかえひっかえするにつれて、そこでの大人たちを観察し、自分がいかに適応するかに右往左往した生き方だ。彼女は家を持たないのである。社会に属せず、年相応の遊びもせず、ネグレクトされている。親を持たずに街をほつつき歩いている浮浪児と変わらない。

春さんは、注射を嫌がり手を焼かされるこの子に、ガブリと噛まれた時、いざとなったときに取っておいた、自分の強さを不意に出してしまったことを悔しが。悔しが。春さんに、思わずクスッと来るわたし。そろそろ、観音様へお参りに行く時間となった。

(おわり)

境界が流れるということ(幸田文版 家政婦は見た)

幸田文の『流れる』を読んで、最初は何を描こうとしている作品なのかよくわからなかった。主語が見当たらず、しかも一文が長め。

なんとなく「空気」を読んでいるようで正直言って、最初は少し疲れた。読了できるか不安を感じた。話の内容も、特に大きな事件が起こるわけでもない。芸者の家の日常を女中の目から淡々と描かれていく。どちらかといえば、ドキュメンタリー的であると思った。

ある意味で「幸田文脚本・家政婦は見た」とでもいえようか。

(ただ、そういう視点を見つけたら、今度は逆に親近感を覚えた。それはそれで不思議なことだが)

しかし読み進めるうちに、この作品の面白さは出来事そのものよりも、主人公・梨花の立ち位置の変化にあるのではないかと思うようになった。

梨花は最初、芸者の世界を外側から見る「しろと」として登場する。作法も空気もわからず、どこか客観的にこの世界を観察している。

しかし日々を共にするうちに、少しずつその世界の内側へ入り込んでいく。

最初は明確だった「外の人」と「内の人」の境界が、徐々に薄れていくのである。

その変化を象徴していたのが、終盤の「しろと」と「くろうと」をめぐる場面だった。

梨花が主人の長唄について自分の感想を口にした時のこと。

(引用はじめ)

「ほんとうにけさは結構でよろしゅうございました。きのうまでとはぐっと違っておりました」(中略)

「変だわねえ。それがどうして、きのうときょうの違いがわかるんだらう」(中略)

「どうしてわかつたんだか教えてよ」(新潮文庫 P264-266)

(引用おわり)

玄人の世界の厳しい論理が梨花に突きつけられる。そこでは単なる感想ですら、自由に語れるものではない。

芸の世界には芸の世界の筋や作法があり、それが玄人の矜持を支えている、ということか。

この作品では「しろと」と「くろうと」という言葉が何度も出てくる。

それは単なる技能の差ではなく、世界の内側にいる者と外側にいる者を分ける境界線なのだと思う。

しかし、その境界線も固定されたものではない。時間を共有し、関係を重ねる中で、境界は少しずつ揺らぎ、流れていく。

そう考えると、『流れる』の「流れる」とは、人や金や時代だけではなく、関係性そのものが流れていくことを意味しているのかもしれない。

まさに「家政婦は見た」的であると感じた。

人は共同体の中で、いつのまにかその世界の論理を身につけていく。そして気づかぬうちに、自分もその流れの一部になっていく。

『流れる』は、そんな人間のあり方を静かに描いた作品なのだと思う。

(おわり)

『流れる』 感想文

最初の玄関の犬の汚い感じがすごくインパクトがあって、嫌だなと思いながら様子が勝手に想像してしまう感じがすごい文章だなと思いました。

でも私は少し難しく感じてなかなか読み進められませんでした。

分かるところもあるし、ここはどういう意味なのか分からなくて読み飛ばしたりとかで、よく分からなかった事も多かったのですが印象に残るところは

(引用はじめ)

頼りどころがなければならぬ、はじめから感傷もないし結構一人でやって行く。頼りどころのあるうちは実は頼れるだけの弱さをもっているのと同じだし、頼るところのないのは情なさそうで実は強さである。頼るところを確保していて頼らないのがいちばん強い。(新潮文庫 P.171)

(引用おわり)

梨花が体調を悪くして心細くなった気持ちと、これまでも一人で頑張ってきたし、これからも自分は頑張れるんだという気持ちかなと思いました。

じっくり読むともっと面白いこともあると思うので、読書会でもっと理解を深められたらいいなと思いますのでよろしくお願いします。

(おわり)

『流れる』読書感想文

(引用はじめ)

つい暫くまえまで何年間か、主人とこの男はとにかく内うちのあいだから 姪の夫というつながりだったのである。離婚はこんなところに不自然なぎこちなさを潜ませているものだとは、岡目だからこそわかる。

(引用おわり)

岡目(おかめはちもく)、第三者の立場で冷静にみるからこそわかる、というのがこの小説のスタンスなんだろうなと思いました。

医者嫌いの不二子と一緒に倒れる主人の姿の美しさや「なんどり」が寝起きに布団から起き上がる仕草の色っぽさに魅了されるところなど、その世界で生きてきた女なら自然にできる所作が素人の女性からみると感動すると思うか思わず見惚れてしまうという場面が印象的でした。

このような梨花の鋭い観察眼、思考パターンはどのような出自から来ているのか、以前は普通の暮らしをしていたらしいことや子供を亡くしていることなど、少しだけ書かれているのだけれど、置き屋に女中として勤めることになった経緯とか素性とかが隠されていてちょっとミステリぽいと思いました。

熱を出して医者から家に帰った方がいいと勧められた時、どうするのだろう、帰る家があるのだろうかと思いましたが、従姉妹がいたようで、あまり親しそうではないけれど、頼れるところがあって少しほっとしました。

最後に誰かが梨花を迎えに来てその人物によって全てが明かされるのかと思ったけれど違いました。

(引用はじめ)

私はね、芸者が耳のうしろを磨かなくなったときから、しろうとに押されはじめたような気がしてしょうがない。むかしは随分ていねいに耳のうしろまで磨きこんだこんだもんだったから、芸者にはしろうとにない清潔さがあったけれどねえ、つまり清潔の信用さね。

(引用おわり)

玄関を履き物や犬の餌や排泄物であれだけ汚くして、押し入れはネズミの糞だらけで、経血で汚れた布団もそのまま平気なくせに、「清潔さ」だとは、よくそんな口がきけたものだと思えました。

隣の堀越しに五目そばを受け取るラーメンチャレンジのシーンが面白かったです。

(おわり)

『流れる』 読書感想文

本作で度々言及されるのは、シロウトとクロウトの違いである。クロウトは芸を生活の糧としているが、彼女らにとって経済と文化は不可分に結びついている。その典型が、置屋の搾取構造だ。

例えば、鬼子母神は主人を通じて染香に借金を負わせ、芸者としての収入を管理する。金の出入りを握られ、花柳界に閉じ込められる状況は、玄人としての「美しさ」や「立ち居振る舞い」が、経済的依存の上に成り立っていることを示している。

こうした花柳界の構造は、単なる芸の世界に留まらない。実は文学もまた、同じ「人間を売り物にする玄人の世界」であるのだ。

芸者が身体と芸を商品として差し出すように、作家は自身の経験や内面を商品化せざるを得ない。幸田文自身、父露伴の死後、回想録で文壇に認められたものの、次第に「想い出屋」と自嘲するようになった。個人的な喪失や思い出を「売り物」にし、生活の領域にまで仕事が入り込む点で、文学と花柳界は構造的に同じなのである。

この文脈で考えると『流れる』とは作者、幸田文のクロウトらしさの再発見の物語であることが見えてくる。1950 年、幸田文は一度「断筆宣言」を行った。これは「想い出屋」的な執筆に嫌気が差したためと言われる。文豪・幸田露伴の娘として生まれ、クロウトの世界に囲まれて育った彼女は、半分シロウト、半分クロウトという複雑な立場にあったのではなかろうか。

しかし翌年から住み込み女中として働き、その経験を基に執筆を再開し、『流れる』を完成させる。

作中、主人公の梨花は、クロウトの世界の「狭さ」の中に、「豊かさ」と「安心感」を感じる。広大で空虚なシロウトの世界とは違い、そこには耳の裏まで行き届くような濃密さと芳醇さがあつた。梨花が主人の三味線の音色を聞き分ける場面は、彼女が元々クロウトへの強い親和性を持っていたことを象徴している。つまり梨花は、幸田文自身が秘めていたクロウトとしての潜在性を体現した人物だったのである。

こうして本作は、作者・幸田文の「再発見」の軌跡を映し出している。すなわち、梨花の最終的な選択は、幸田文自身が半シロ半クロの位置からクロウトの世界に留まり作家としての新たな一步を踏み出す決意とも取れるのだ。

(おわり)

詩的精神浄火読書感想文

『流れる』は私が「文学」なるものに触れた一冊である。だから無粋は控えたい。で、芥川龍之介と谷崎潤一郎は文芸の価値基準を焦点とした論争を展開しており、谷崎の主張が筋の面白さ、これは『饒舌録』によれば <<物の組み立て方、構造の面白さ、建築的美しさ>> といった構造的美観に重きを置く一方で、芥川の主張はそうした「筋の面白さ」に文学的価値があるのではなく、専ら「詩的精神」を重要視しており、この詩的精神とは『文芸的な、余りに文芸的な』によると <<どう云ふ思想も文芸上の作品の中に盛られる以上、必ずこの詩的精神の浄火を通つて来なければならぬ。僕の言ふのはその浄火を如何に燃え立たせるかと云ふことである。それは或は半ば以上、天賦の才能によるものかも知れない。いや、精進の力などは存外効のないものであらう。しかしその浄火の熱の高低は直ちに或作品の価値の高低を定めるのである。>> という。ここで、彼らの価値基準の相違はあくまで相違であり、どちらがどうという訳でもなければ、その妥当性を判断しうる者はこの世におらず、そもそも二元論的に語られるべき性質の事柄ではない。

それにしても『流れる』を読むにつけ頭をよぎるのは芥川の語った「浄火」についてであり、本書は著者幸田文に内在する純粋な素質としての浄火があらゆる文章に反映されているかの様である。それだから作為の感はない、つまり意図的な浄火まがいなのではなく元より備わる浄火である。そのため『流れる』には谷崎のいう構造的美観はまるで感じられず、単なる置屋に暮らす女中による見聞録であり(作品の欠陥だと言いたいのではない)、この場合、却って置屋とは「素材」に留まり、梨花による思念や情緒の複雑さ、および作中に度重なり介入する著者(梨花の分身)による外部へ向けた観察的な視線に伴い、著者自身の心の動きが多様な言葉となって現れ、その言葉を純粋な感覚で採り上げている感を受ける。だから浄火は純粋無垢だといえる。その例を二点挙げると、まずはこれも『文芸的な……』からの引用となるが、<<僕はもう十数年前、或山中の宿に鹿の声を聞き、何かしみじみと人恋しさを感じた。あらゆる抒情詩はこの鹿の声に、——雌を呼ぶ雄の声に発したのであらう。>>

上記は芥川がひとりで勝手にそう思ったからそう書いた。雄の声が雌を呼ぶためかどうかは不明である。同様に『流れる』の巻末において幸田文は、

<<水は流れたがって、とつと走り下りていた。そのくせとまりたがりもして、たゆたい、渋り、淀み、でもまた流れていた。——中略—— 橋はなんでもない。なんでもないけれど橋へかかると、なぜか心はいつも一瞬ためらって、川上川下、この岸あの岸と眺めるのだ。>>

とあり、これも勝手にそう思ってその通りに書いた、ただそれだけの事柄だがそう言っては何だかつまらない。心的作用を経て著者の内部世界である主観に価値を見出す、『流れる』はそうした詩的精神の浄火が込められた芥川の立場を取る作品だと言いたい。ただし、芥川や幸田文の浄火を感じ得てより一層の興味深さを覚える作品もあれば、一方で読み物として面白い作品も当然あり、繰り返しになるがどちらがどうという訳でもない。

といったことを考えながら、この感想文で最も言いたかったことは「世の中には二種類の人間しかいない。それは『流れる』を解する者と解さない者である」って言いたかった。

以上

(おわり)

狹斜の巷に集積された文化の消滅

（引用はじめ）

梨花がいやだなと思う。なんの、料理場勤めをするものが今すぐ病気の子どもを引き取れる法がないくせに、そうしたはったりみたいなことを云う。（中略）男は帰りに主人の前に出ると、すぱっと手をついて折り目のある挨拶をした。職業的にそうした習慣があるのだが、あるいはわざと他人行儀にしてしゃちほこばって意地が見せたいのか、少し滑稽でもあった。つい暫くまえまで何年間か、主人とこの男はとにかく内々のあいだがら――姪の夫というつながりだったのである。離婚はこんなところに不自然なごちなさや潜ませているものだと、岡目だからこそわかる。（P.120-121）

（引用おわり）

昔は、祖父母の家に久々に行ったときには、畳に膝をついて挨拶したものである。親が「すぱっと手をついて折り目のある挨拶」を子どものうちから教育していたので、自分も大人になって「すぱっと手をついて折り目のある挨拶」というものを心がけていたが、世間から遠ざかってもう十何年もやっていない。そもそも日本家屋で畳敷きだから、すぱっと挨拶も折り目正しく決まるのだが、フローリングでは卑屈な土下座になってしまう。

映画版ではこの板前は加東大介が演じていた。離婚すれば赤の他人ではあるが、この狹斜の巷での客商売同士であるから、主人と板前は簡単に縁が切れるわけではない。彼のしゃちほこばった意地を見抜く梨花からは、不二子を引き取れる法がないのに、引き取れるようなことをいう男の見栄っ張りな意地に、容赦ないツッコミが入る。

「狹斜の巷（きょうしゃのちまた）」と書いたが、漢字変換に出てこない。遊郭や花街を指す言葉である。この言葉の由来となった唐の長安の花街も、入り組んだ狭い猥雑な場所だったそうである。

風呂場が違法建築でそこそこに引火しそうだったり、五目蕎麦を斜向かいの町中華から小路を渡して取り寄せたり、隣の焚き火を火事と勘違いして消そうとして嫌味を言われたりと（P.164）本当に狭さを感じさせるごちゃごちゃした描写が多い。物理的にも狭い街に、精神的にも入り組んだ人間関係が蔦のようにはびこっている。お歳暮の贈り物を、そのまま右から左に返礼に使ったりするようなつまらないやりくり（P.139）のように、この界限では義理と人情が複雑に交錯しており、それと呼応するように言葉にも裏と表があり、素直に受け取れない入り組み方をする。

水野の女将が使った「なんどり」は京言葉で「おだやか」という意味だそうである。京言葉や漢籍の故事逸話に由来する言葉がこの花街に流れ込んで、生活に融け込んでいる。そういう文化の豊富さに、梨花も感心している。

（引用はじめ）

よその土地を意識するときは容易に協力体になれるのに、その圧がさがるとたちまち仲間割れの同士討ちになる。絶えずなにか憎むものをほしがっている性格が、土地全体に行きわたっている様子だ。（P.260）

（引用おわり）

そんな愛憎の街であった柳橋の狭斜の巷も 20 世紀の最後に消滅した。関東大震災や東京大空襲であらかた失われていた文化にトドメを刺しながら、東京の再開発が続いている。

（おわり）